1　東京都･大阪市中央卸売市場の需給動向（令和５年９月）

野菜振興部　調査情報部

【要約】

●東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万691トン、前年同月比91.6%、価格は1キログラム当たり309円、同116.4%となった

●大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万8506トン、前年同月比96.0%、価格は1キログラム当たり267円、同110.8%となった。

●11月は、10月までの品薄による高値推移から、平年並みの価格に落ち着くと予想される。

（１）気象概況

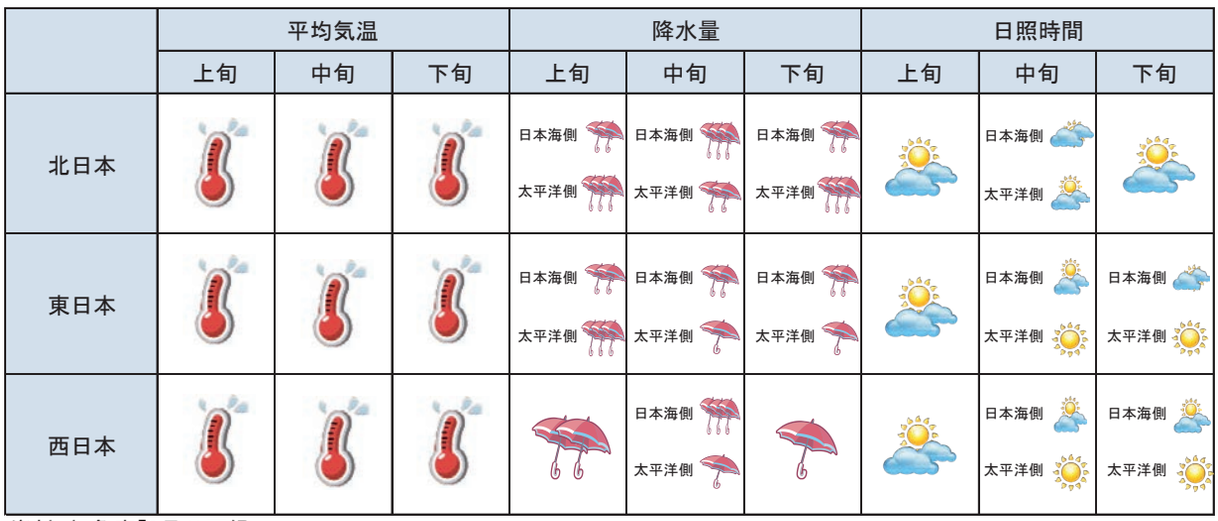
上旬は、北・東・西日本では、太平洋高気圧に覆われて晴れた日もあったが、熱帯低気圧や台風、前線の影響で曇りや雨の日もあった。特に、台風第13号の影響で記録的な大雨や線状降水帯が発生した所もあったため､旬降水量は、北日本太平洋側でかなり多く、東日本太平洋側で多かった。一方、北・東・西日本日本海側と西日本太平洋側では平均並だった。旬平均気温は、北日本を中心に暖かい空気に覆われやすかったため、北・東日本でかなり高く、西日本と沖縄・奄美で高かった。旬間日照時間は、全国で平年並だった。

中旬は、北日本では、気圧の谷や前線、湿った空気の影響を受けやすかったため、旬降水量は、北日本日本海側でかなり多く、旬間日照時間は少なかった。東・西日本では、太平洋側を中心に高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、旬間日照時間は多く降水量は少なかった。一方、西日本日本海側においては、前線や湿った空気の影響を受けやすかったため、旬降水量は多かった。旬平均気温は、暖かい空気に覆われやすく、また南から暖かい空気が流れ込みやすかったため、北・東・西日本でかなり高かった。1946年の統計開始以降、９月中旬として、東日本（平年差＋4.0℃）で１位、西日本（平年差＋2.5℃）で１位タイの高温となった。旬間日照時間は、北日本太平洋側と東・西日本日本海側では平年並だった。旬降水量は、北日本太平洋側、東日本日本海側では平年並だった。

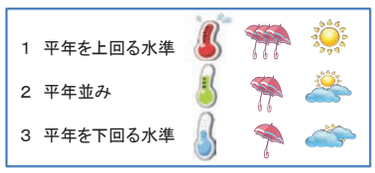
下旬は、北日本と東・西日本日本海側では、旬の前半は、高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、後半は、低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多く、旬降水量は西日本日本海側で少なく、北・東日本日本海側で平年並みだった。旬間日照時間は、東日本日本海側で少なく、北･西日本日本海側と北日本太平洋側では平年並みだった。東･西日本太平洋側では、旬の前半は、秋雨前線の影響を受けて曇りの日が多く大雨となった所もあったが、後半は、上空の気圧の尾根の影響で晴れた所が多かったため、旬間日照時間は多かった。旬降水量は、西日本太平洋側でかなり少なく､東日本太平洋側で少なかった。北日本太平洋側で多かった。旬平均気温は、旬の後半を中心に暖かい空気に覆われやすかったため、全国的にかなり高かった。1946年の統計開始以降､９月下旬として､東日本（平年差＋3.2℃）と西日本（平年差＋2.9℃）で１位の高温となった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図１）。

図１　気象概況



資料：気象庁「9月の天候」



（2）東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万691トン、前年同月比91.6%、価格は１キログラム当たり309円、同116.4%となった（表１）。

表１　東京都中央卸売市場の動向（９月速報）

品　目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	110,691	91.6	91.7	309	116.4	115.5	306	319	302
だいこん	7,023	87.5	76.6	152	105.7	136.6	147	158	150
にんじん	5,486	88.3	79.9	226	108.1	156.4	211	251	215
はくさい	9,005	92.8	92.5	92	108.5	85.7	95	99	83
キャベツ類	15,585	88.4	93.4	90	124.0	96.1	91	88	91
ほうれんそう	607	68.6	75.2	1,045	134.4	128.0	1,144	1,069	951
ねぎ	3,528	82.0	85.2	517	135.5	143.9	459	517	570
レタス類	9,144	99.3	105.3	205	101.4	103.2	249	216	159
きゅうり	7,156	94.0	93.0	347	122.1	117.6	344	351	344
なす	3,022	93.2	103.2	392	132.4	105.4	381	421	373
トマト	5,434	85.3	84.7	609	129.6	133.1	479	736	620
ピーマン	2,157	78.8	88.9	582	172.4	143.4	553	602	586
さといも	661	98.9	92.2	344	100.2	102.9	338	349	343
ばれいしょ	6,802	116.8	102.9	134	94.3	98.3	137	134	130
たまねぎ	9,376	96.5	98.3	105	89.9	104.8	102	107	107

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注１：平年比は過去５カ年平均との比較。
注２：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの９市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が数量減から堅調な動きとなり、大幅な高値で推移した前年をかなりの程度上回り、平年を５割以上上回った（図２）。

葉茎菜類は、ねぎが給食需要などが回復したことにより太物が少ない中で引き合いが強まり、さらに降雨や稲刈りなどの作業も重なって出荷量が減少したため、下旬に向けて価格を上げ、高めに推移した前年を３割以上上回り、平年を４割以上上回った（図３）。

果菜類は、トマトの価格が中旬以降高騰し、前年を３割近く上回り、平年を３割以上上回った（図４）。

土物類は、たまねぎの価格が、暑さが続いたことにより需要が芳しくなく、高めに推移した前年を１割強下回り、平年をやや上回った（図５）。

なお、品目別の詳細については表２のとおり。

図２　にんじんの入荷量と卸売価格の推移

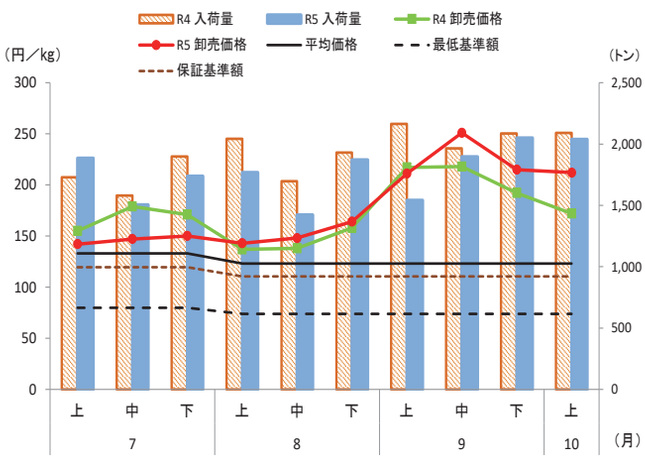


図３　ねぎの入荷量と卸売価格の推移

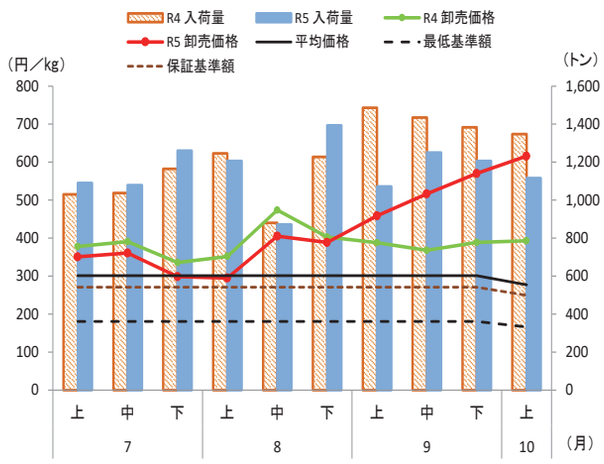


図４　トマトの入荷量と卸売価格の推移

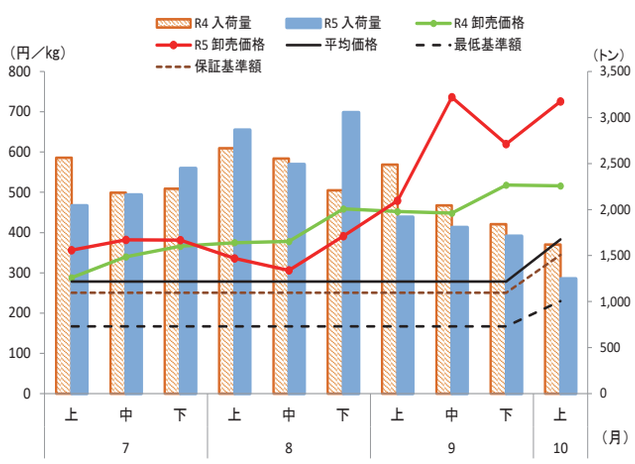
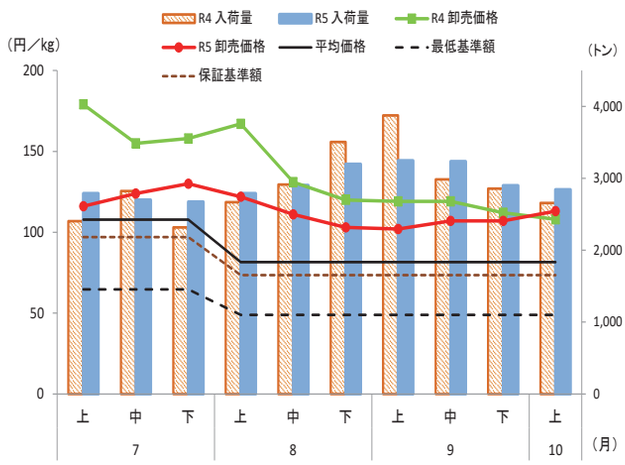


図５　たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※1　卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※2　平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※3　事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表２　品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	9月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	北海道産を中心に青森産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育は順調でやや前進傾向であったが、高温により根茎の肥大が停滞しており、軟腐病の発生もみられた。青森産の作付面積は前年並みで、9月に入ってからやや回復傾向にあったものの、病害が多く正品率が低下していた。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割以上下回った。 価格は月間を通して堅調な推移となり、大幅な高値で推移した前年をやや上回り、平年を3割以上上回った。
	にんじん	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、低温と日照不足の影響により生育は停滞し、その後の高温・干ばつ傾向から細物傾向で、品質不良も多いが回復傾向にはある。中国産の輸入が前年を5割近く上回っている。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割ほど下回った。 価格は数量減から堅調な動きとなり、大幅な高値で推移した前年をかなりの程度上回り、平年を5割以上上回った。
葉茎菜類	はくさい	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、概して高温・干ばつ傾向で非常に厳しい栽培環境となり、品質低下が散見された。総入荷量は前年、平年ともかなりの程度下回った。 価格は大幅な安値で推移した前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく下回った。
	キャベツ類	群馬産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、全体的に干ばつ傾向の中、局地的な多雨により品質低下が散見された。後続の産地も干ばつで定植に遅れがみられる。総入荷量はやや多かった前年を1割以上下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は安めに推移した前年を2割以上上回り、平年をやや下回った。
	ほうれんそう	群馬産、栃木産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響により生育が不良で虫害も多発している。栃木産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響により生育の停滞がみられたが、9月に入って夜温が低下したことからやや回復傾向となった。総入荷量は茨城産の数量減少が著しかったことにより、やや多かった前年を3割以上下回り、平年を2割以上下回った。 価格の動き自体はあまりよくないものの、絶対数不足の影響により下がらず、前年を3割以上上回り、平年を3割近く上回った。
	ねぎ	北海道産、青森産、秋田産中心の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、高温により生育は停滞した。青森産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響により細物傾向となった。軟腐病などの病害が散見された。秋田産の作付面積は前年並みで、7月の大雨と8月の高温・干ばつにより生育は停滞した。全体的に棚持ちが悪い傾向であった。総入荷量は前年を2割近く下回り、平年を1割以上下回った。 給食需要などが回復したことにより太物が少ない中で引き合いが強まり、さらに降雨や稲刈りなどの作業も重なって出荷量が減少したため、下旬に向けて価格を上げ、高めに推移した前年を3割以上上回り、平年を4割以上上回った。
	レタス類	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、8月下旬から9月にかけての高温・干ばつ傾向により、結球不良で生育が遅延し、棚持ちの悪さも散見された。総入荷量はやや多かった前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。 価格は、数量の回復に伴って下旬に向けて落ち着きをみせ、前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。

果菜類	きゅうり	福島産を中心に群馬産などの関東産の入荷となった。福島産の作付面積は前年並みで、夏秋ものは梅雨明け以降の高温により虫害が平年より多くみられ、抑制ものは病害が散見された。群馬産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、高温の影響により果形の乱れが散見された。総入荷量は前年、平年ともかなりの程度下回った。 価格は安めに推移した前年を2割以上上回り、平年を2割近く上回った。
	なす	群馬産を中心に栃木産、茨城産など関東産の入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響により樹勢の低下が散見された。降雨の少ない地域はやや生育不良となった。栃木産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調だった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、高温・干ばつの影響により樹勢の弱い圃場（ほじょう）が多く、着果数は少なく虫害が散見された。高齢化による生産者の減少が顕著である。総入荷量は多かった前年をかなりの程度下回り、平年をやや上回った。 価格は、関東産の落ち着きにより堅調な動きとなり、安かった前年を3割以上上回り、平年をやや上回った。
	トマト	千葉産、北海道産、福島産中心の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、定植以降の高温・干ばつにより一部着果不良が見られたものの、生育はおおむね順調となったがやや小玉傾向であった。北海道産の作付面積は前年並みで、高温の影響による軟化、割れはやや落ち着いたものの、着果不良や花落ちが見られたため数量は少ない。福島産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であったが、高温による小玉傾向に加えて病虫害の発生が多かった。総入荷量は前年、平年とも1割以上下回った。 価格は中旬以降高騰し、前年を3割近く上回り、平年を3割以上上回った。
	ピーマン	茨城産、岩手産中心の入荷となった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、8月の高温により生育は遅延した。病害が蔓延しており、作付け減少の原因になっている。岩手産の作付面積は前年並みで、高温･干ばつの影響により日焼け果、赤果、尻腐れ果（果実の先端の傷み）が散見されており、収量が減少した。総入荷量は多かった前年を2割以上下回り、平年を1割以上下回った。 価格は、絶対数不足から月間を通して堅調な推移となり、安めに推移した前年を7割以上上回り、平年を4割以上上回った。
土物類	さといも	千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、定植以降の天候に恵まれ生育はやや前進した。後続の埼玉産についても適度な降雨と天候に恵まれ、生育はおおむね順調。総入荷量は前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。 月間を通して安定した価格となり、前年並みとなり、平年をわずかに上回った。
	ばれいしょ	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育は前進傾向も高温・干ばつの影響により、やや小玉傾向であった。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をわずかに上回った。 価格はやや高めに推移した前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。
	たまねぎ	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育はやや前進傾向も、高温･干ばつの影響により小玉傾向であり、棚持ちが懸念される。中国産の輸入は前年を1割以上下回る。総入荷量は前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。 価格は、暑さが続き販売環境が芳しくなく、高めに推移した前年を1割強下回り、平年をやや上回った。

（執筆者：東京シティ青果株式会社　平田　実）

（3）大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は３万8506トン、前年同月比96.0%、価格は１キログラム当たり267円、同110.8%となった。（表３）。

品目別の詳細については表４の通り。

表３　大阪市中央卸売市場の動向（９月速報）

品　目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	38,506	96.0	96.2	267	110.8	111.5	271	272	258
だいこん	2,449	86.8	71.8	145	102.1	132.9	137	160	138
にんじん	2,589	102.8	96.6	223	109.9	159.6	220	262	190
はくさい	4,018	83.6	95.1	90	107.1	86.2	91	101	79
キャベツ類	6,197	94.4	102.3	81	112.5	88.0	81	79	83
ほうれんそう	265	85.4	81.7	998	108.6	109.8	1,106	986	923
ねぎ	751	87.9	89.1	621	129.1	125.0	584	631	640
レタス類	1,892	107.4	92.8	205	95.3	105.3	259	212	156
きゅうり	1,724	100.8	109.3	366	116.6	101.4	391	377	329
なす	790	94.9	114.1	376	131.0	109.3	369	396	361
トマト	1,965	90.8	93.4	587	123.3	123.1	462	699	627
ピーマン	565	85.4	94.0	555	140.9	127.1	530	570	561
さといも	112	93.4	81.6	355	108.2	108.9	399	357	339
ばれいしょ	2,900	103.1	102.7	120	94.5	98.1	122	124	113
たまねぎ	5,026	122.3	109.4	107	81.1	103.8	104	107	109

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年比は過去5カ年平均との比較。
注２：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表４　品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	9月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	北海道産、岐阜産、青森産が主体となる入荷であった。本来は北海道産が中心の入荷となるはずが、極端な気温高による生育不良で、品質低下品が多く産地での圃場廃棄も多く見られたため、出荷量が激減した。上旬の入荷量は前年の3割に満たず、旬を追うごとに回復傾向となったものの、下旬になっても前年を大幅に下回り、月間では前年を大きく下回った。岐阜産は順調だったが、青森産は伸び悩んで月間では前年を大幅に下回った。全体では前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。 入荷量が少ない中でも品質低下品が多く見られたことから価格は伸び悩み、月間全体では前年をわずかに上回り、平年を3割ほど上回った。
	にんじん	北海道産が中心となる入荷であった。極端な気温高により品質低下品が多く、出荷量が少ない状況が続き、下旬に回復傾向もみられたが伸び悩んだ。国産の品薄を受けて業務用などで輸入品へのシフトが起こり、輸入の中国産の入荷量が増え、全旬とも前年を大きく上回り、月間では前年の2倍以上となった。月間全体では前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。 価格は、品薄感から高値推移となり中旬に高騰したが、品質低下品が多く、下旬には下落した。月間では前年をかなりの程度上回り、平年を6割近く上回った。

葉茎菜類	はくさい 	長野産の入荷があった。干ばつの影響は回復し、入荷量は旬を追うごとに増加傾向となったが、品質低下品が多かったため、大きくは増えずに全旬とも伸び悩んだ。月間では前年を大幅に下回り、平年をやや下回った。 価格は、連休需要により引き合いが強まったため、中旬に上伸したが、品質低下品が多かったことと、下旬に始まった秋作による入荷増量で再び下落した。月間では大幅に安かった前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく下回った。
	キャベツ類 	この時期の主体である群馬産と長野産の入荷となった。長野産は、気温高と干ばつの影響により南佐久地区の生育が不良で、全旬を通じて入荷量が少ない状況が続いた。特に上旬と下旬は前年の半量以下で、月間でも前年を大きく下回った。群馬産も干ばつの影響を受けて上旬は少なく前年をかなり下回ったが、中旬以降は回復傾向となり前年を上回った。しかし月間では前年を若干下回った。月間全体では前年をやや下回り、平年をわずかに上回った。 ほかの野菜の出回り量が少なかったことにより、キャベツを絡めた販促イベントの企画提案が多く、引き合いが強かったため、全旬とも前年よりも高値となった。月間では前年をかなり大きく上回り、平年をかなり大きく下回った。
	ほうれんそう 	岐阜産が中心となる入荷であった。極端な気温高の影響により生育不良となり、入荷量は伸び悩んだ。他産地も同様に生育が悪く、群馬産は前年を大きく下回り、長野産は前年の2割にも満たない入荷量となった。月間全体でも前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。 価格は、絶対量不足から高値推移となったが、品質低下品も多かったため伸び悩み、旬を追うごとに下落傾向となった。月間では前年、平年ともかなりの程度上回った。
	ねぎ（白ねぎ） 	長野産を中心として、北海道産や鳥取産の入荷があった。北海道産は降雨と極端な気温高の影響により生育不良で、特に上中旬の入荷量が少なく、月間でも前年をかなり下回った。長野産は旬を追うごとに入荷増量となるも伸び悩み、月間では前年を下回った。鳥取産も気温高により生育が悪く、月間では前年の半量以下であった。国産の出回りが少ない分、業務用などが輸入の中国産にシフトしたため、前年の2倍以上の入荷量となった。月間全体では前年をかなり下回った。 価格は、品薄感から高値推移となり、旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年を大幅に上回った。
	ねぎ（青ねぎ） 	徳島産と香川産が主体となる入荷であった。本来この時期の中心となる徳島産は、極端な気温高の影響により生育不良となり、全旬とも入荷量が少ない状況が続いた。月間では前年を大幅に下回った。香川産や大阪産など潤沢な入荷となった地域もあったが、月間全体では前年を下回った。 価格は、絶対量不足から旬を追うごとに上昇を続けた。月間全体では前年を大幅に上回った。
	レタス類 	玉レタスは長野産を中心とする入荷であった。干ばつの影響が残る中でも比較的順調な入荷が続き、月間では前年をやや上回った。サニーレタスも長野産が中心で、全旬とも潤沢な入荷が続き、下旬に増加して前年を大きく上回り、月間でも前年を大幅に上回った。リーフレタスも長野産が中心で、全旬とも安定した入荷が続いて月間でも前年並みとなった。レタス類全体では前年をかなりの程度上回り、平年をかなりの程度下回った。 野菜全体の高値の影響により、安定した入荷量の中でも単価は下げ止まり、量販店での荷動きも悪く、価格は伸び悩んだ。玉レタスは月間では前年を若干上回り、サニーレタスは入荷増量に伴い旬を追うごとに下落した。リーフレタスも消費が鈍く、業務筋の需要も伸びず旬を追うごとに下落した。レタス類全体では月間の価格は前年をやや下回り、平年をやや上回った。

果菜類	きゅうり	主力の福島産を中心に群馬産や長野産も主体となり、後続の秋産地の大阪産の入荷も始まった。各地とも気温高の影響で正品率が低く、出荷量は伸び悩んだ。福島産は作の終盤でもあり、旬を追うごとに入荷減となった。群馬産や長野産も同様に入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は絶対量不足から高騰した。旬を追うごとに落ち着き微落傾向であったが、月間では前年を大幅に上回り、平年をわずかに上回った。
	なす	千両系は京都産と群馬産が主体となり、長なすは愛媛産が中心となった。なす全体で前年の入荷量が多かったため、前年よりも少ない地域が多かった。主力の京都産は前月の台風の影響により上旬は少なく前年の半分以下となった。中旬には回復傾向となったが、極端な気温高により生育が進まず、回復が遅れて下旬は伸び悩んだ。月間では前年を大幅に下回った。群馬産は順調であったが作の終盤で下旬には入荷減となった。愛媛産の長なすも気温高の影響により入荷量が伸びず、月間では前年を大幅に下回った。なす全体では前年をやや下回り、平年をかなり大きく上回った。 価格は、品薄感に加えて入荷量が伸びる兆しが見えないことから高値推移となった。月間では前年を3割ほど上回り、平年をかなりの程度上回った。
	トマト	岐阜産を中心に岡山産や熊本産などの入荷もあった。主力の一つである北海道産は、降雨と気温高の影響により生育不良であったため出荷量が極端に少なく、全旬とも少なかったが月間でも前年の1割以下という状況であった。関東の産地も台風の影響などにより不作で入荷量が少なかったが、他の産地は潤沢な入荷となった。月間全体では前年、平年ともかなりの程度下回った。 価格は、北海道産の入荷がほとんどないことが影響し、品薄感から中旬以降に高騰した。気温高が続き、量販店の需要も高く不足感が続いたため、月間では前年、平年とも大幅に上回った。
	ピーマン	愛媛産、茨城産、宮崎産が主体であったが、各産地とも極端な気温高により着果不良が続き、加えて関東や東北の各産地は品質低下品が多く見られたことから、出荷量がいずれも少なく、全旬とも低迷を続けた。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は絶対量不足から高騰して高値推移となった。月間では前年、平年とも大幅に上回った。
土物類	さといも	愛媛産が中心となる入荷であった。輸入の中国産の入荷もあったが、現地価格が高く、国産との差がほとんどなかったことから前年の3割程度の入荷量であった。季節的には月見需要がある時期だったが、今年は中秋の名月が月末だったことや、野菜全体の高値の影響により前年より高値推移となったことなどから月見特売はなかった。学校給食での需要はあったものの、全体としては積極的な入荷要請とならず、産地の出荷量は潤沢であったが入荷は減少した。月間では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。 価格は、野菜全体の高値の影響もあって高値推移となり、月間では前年、平年ともかなりの程度上回った。
	ばれいしょ	丸芋は北海道産が中心となる入荷であった。全旬とも安定した潤沢な入荷が続き、月間では前年を大幅に上回った。メークインも北海道産が中心で、道内各産地が出揃い、上旬は前年の2倍以上となったが、中旬以降は減少した。月間では前年をかなり上回った。ばれいしょ全体では前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。 丸芋、メークインとも大きな動きもなく安定した価格での推移となった。価格は、ばれいしょ全体では前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。
	たまねぎ	北海道産が中心となり、兵庫産の入荷もあった。北海道産は潤沢だったが旬を追うごとに減少傾向となった。月間では前年を大幅に上回った。兵庫産は、前進出荷による残量不足で入荷量が少なかった前年を、全旬とも大きく上回って推移した。月間では前年の2倍程度となった。輸入の中国産の入荷は、極端に少なかった前年を大きく上回った。全体でも前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格に大きな動きはなく、全旬とも安定した推移となった。高値だった前年を大幅に下回り、平年をやや上回った。

（執筆者：東果大阪株式会社　新開　茂樹）

（4）首都圏の需要を中心とした11月の見通し

北海道産、東北産の夏秋野菜の切り上がりが全般に早く、特に果菜類はかなり少なくなった。暖冬となれば11月いっぱいくらいは出荷できると予想される。葉物野菜は、９月いっぱい続いた気温高による影響は10月までで、11月には急回復すると予想される。西南暖地の果菜類は、ほぼ平年並みに10月から始まり、11月に急増する可能性もある。果菜類は、高温下で育苗すると定植後に作柄が乱れやすいと言われるが、生産者の技術が進歩しているためかつてのような減収はないと予想される。重量野菜は総じて干ばつ気味の中での定植であったことから、根張りはかなりしっかりしていると推測される。10月までの品不足から、年末に向けて急速に回復するとも予想される。

11月は、10月までの品薄による高値推移から、平年並みの価格に落ち着くと予想される。

根菜類

だいこんは、千葉産（ちばみどり）は中旬からある程度のピークは来るが、生育全般は必ずしも順調でない。特に早く蒔（ま）いた物が遅れており、さらに欠株も見られる。暖冬であれば前進する可能性もあり、11月としては例年並みの出荷になる可能性もある。出荷開始時期のものは短めで、肌（表面）の仕上がりが悪いと予想される。千葉産（ちば東葛）の鎌ヶ谷市周辺の産地は、10月中旬から始まり、下旬から11月いっぱいがピークと予想される。今年は一斉に定植されたが、芯食い虫の発生が懸念される。出荷のペースは平年並みで、L中心でスタートし、徐々に2Lの比率が増えると予想される。青森産は高温・干ばつの影響により短根に仕上がり、さらに虫害などで正品率が低下している。10月中旬頃からほぼ元通りに回復してくると予想しているが、９月末の段階では出荷のピークには至っていない。このまま例年の70%程度と少ないまま11月上旬に早めに切り上がるといった展開も予想される。

にんじんは、千葉産の早い作型の物が例年と同様に10月末頃から出荷が始まると予想される。播種（はしゅ）後に台風による強風の影響で一部欠株もみられる。本来は11月10日～ 15日に本格化してくるが、今年のピークは20日過ぎと予想される。全体では大きな減収はないが、若干遅れる展開が予想される。北海道産は例年通り11月５日までの出荷と予想される。圃場で品質の悪い物をはじいているため、収量は例年の70 ～80%と少ない。M・Lサイズ中心のやや小ぶりの仕上がりである。

葉茎菜類

キャベツは、千葉産は11月中旬から出荷のピークと予想している。現状は欠株がみられるなど、例年を下回ると予想している。また、出荷開始時期はやや小ぶりの仕上がりと予想される。愛知産は前年同様、10月４～５日から始まる。高温・干ばつの影響はさほどなく、生育は順調である。11月から年明け２月までがピークと予想される。サイズは今後の出来次第だが、例年通り潤沢に出荷できると予想される。

はくさいは、茨城産は10月末頃から始まるが、干ばつ気味だったことから定植が遅れ気味だったため、本格的に増えるのは11月中旬からで、12月がピークと予想される。長野産の出荷は、10月初めの段階で日量8000 ～9000ケースだが、11月初めには同2000 ～3000ケースに減り、その後も徐々に減りながら20日前後まで出荷できると予想している。暖冬であれば、切り上がりが早まる可能性もある。

ほうれんそうは、群馬産はようやく出荷量が増えてきたが、それでも例年より少なく、猛暑の影響により伸びが鈍い（圃場での傷みも散見される）。10月中下旬には回復し、11月は例年並みの出荷に戻ると予想している。年内のピークも11月と予想される。

ねぎは、青森産の収穫のピークが10月いっぱいで、11月には減ってくると予想される。相場にもよるが、12月までは出荷できると予想される。トータルの出荷量は例年の80%と少ない見込み。茨城産の現状の作柄は悪く、８～９月の高温により圃場でとろけがみられる。2019年、20年にも同様の被害が出て対策を

講じているが、想定を上回る高温であった。９月上旬の降雨により傷みが拡大したため10月の出荷が底となり、11月には回復に向かうと予想される。中旬にはなんとか平年並みの物が出荷されると予想しているが、平年比では70～80%程度と予想している。千葉産の秋冬ねぎは遅れており、例年10月には本格的に始まるが、今年は11月中旬にずれ込むと予想している。12月には例年並みに回復してくると予想している。現状は夜盗虫（夜行性の蛾の幼虫で植物の葉や実を食べる）の発生や病気も見られる。11月の出荷量としては例年の70～80%程度と予想している。

レタスは、茨城産は暑さの影響によりとう立ち気味である。作柄としては豊作基調を予想しており、11月としては平年並みと予想している。香川産の出荷は10月10日過ぎから始まるが、猛暑により、少なめでのスタートと予想される。11月に入ってからがピークと予想される。兵庫産の出荷は10月10日頃から例年並みかやや遅い始まりを予想している。高温下であったが生育は順調である。11月にはピークとなり、12月も引き続き多いと予想される。

果菜類

きゅうりは、高知産は９月末の段階では出始めであるが、全体の５%程度と特別多くない。現状は定植中でもあり、11月に入ってからがピークとなるが、猛暑の影響や大きな自然災害もなく順調である。埼玉産の抑制物は、９月下旬にピークが来て12月までとなるが、不作気味である。正品率が低く、数量的には80～90%で、今後も80%程度と回復は期待できない。加温物は当面10月中旬にピークが来て、11月も例年並みに多いと予想している。トータルでは前年の90%程度と予想される。

なすは、高知産は生育順調で、当面のピークは10月下旬から11月いっぱいまで続く可能性がある。農協出荷の人が増えており、前作から導入されている単為結果性の品種にほぼ切り換わっている。これにより受粉のためのハチのコストが軽減されている。福岡産の冬春なすは例年と同様10月２日から販売が始まる。離農者がいるため、今年の作付けは前年の97%となっている。年内のピークは平年と同様11月と予想される。台風などの自然災害の影響はなかったが、圃場によるばらつきが大きく、害虫の発生も多い。11月としては前年並みかやや下回る出荷となる可能性もある。

トマトは、青森産のピークは終わり、10月以降は安定した出荷が続こう。12月までは出荷できるが、例年より少ないと予想される。群馬産の出荷は標高350～800メートル地帯の圃場からで、年内の暖冬予報により遅くまで出荷できるような体制としている。標高の高い地域は11月上旬までだが、ほとんどの圃場は11月中旬までと予想している。11月としては前年並みかやや下回る出荷と予想され、シーズンの中盤を迎えてサイズはS・M中心の見込み。熊本産は10月に入ってからの出荷となるが、高温の影響により裂果の発生が懸念される。例年は11月末頃から増えて12月中旬まで多いが、暖冬により今年は成熟が早くなる可能性があるため、11月は例年を上回ると予想される。愛知産は若干少なめであるが出荷は始まっており、10月下旬から増えて11～12月がピークと予想される。数量的には前年並みを見込んでおり、サイズは若干小さめで、M中心の見込みである。

ピーマンは、茨城産の抑制物の現状は７～８月の着果が悪く、例年の80～90%と少なめである。今後気温も下がって着果が順調となり、10月中旬頃から増えてきて、11月中下旬には例年並みに回復すると予想される。福島産は高温・干ばつの影響により、果実にひび割れや赤い変色、軟腐病も散見されるが、出荷実績はほぼ平年並みである。現状は減少傾向で、10～11月に増えることはないと予想される。岩手産は今年、出荷のピークがなかった。ハウス物は11月上旬までで、露地物は10月いっぱいで切り上がると予想される。８月の猛暑のダメージが強く、今後暖冬となっても11月の出荷は見込めない。出荷実績は８月末までで95%だったが、９月に減少し、全体では80%程度となっている。宮崎産は８～９月の高温により、一部定植後の苗に影響があったが、大きな被害なく生育は順調である。当面のピークは11月20日前後で、年内に２度目のピークが来ると

予想している。「中型カラーピーマン」が11月から始まり、年末年始にピークが来ると予想され、作付面積は前年並みである。

土物類

さといもは、新潟産の東京方面への出荷はほぼ例年並みに10月中旬から開始予定である。10～11月の出荷は一定で、ピークは12月と予想している。例年通り2Lサイズ中心である。

ばれいしょは、北海道産（ようてい）は８月の高温と少雨により、「男爵」はやや小玉に仕上がっている。そうか病（いもの表面にかさぶたのような斑が出る病気）も見られ、収量はダウンしている。貯蔵して来年の４月まで計画的に出荷していくが、平年を下回る出荷量と予想している。Mサイズ寄りのLサイズ中心である。北海道産（めむろ）の「メークイン」の収穫は、10月初め現在にはほぼ終了した。収量は例年並みで、作柄はやや良であり、出荷は年内から２月まで多いと予想され、Lサイズ中心に仕上がっている。

たまねぎは、北海道産（岩見沢）の収穫作業は続いているが、高温と干ばつの影響により前年よりやや少なめと予想している。全般に小玉傾向で、年内から年明けも計画出荷していくと予想される。北海道産（きたみらい）も収穫は続いており、ほぼ平年作で前年並みである。肥大も問題なく、Lサイズ中心である。引き続き年明け４月いっぱいまでは通常通りの出荷と予想される。

その他

ブロッコリーは、愛知産の出荷の開始は10月20日頃と予想され、ほぼ例年と同様である。11月にピークとなり、一部で苗の病気も報告されているが、前年並みの出荷と予想している。群馬産は定植作業が遅れていることもあり、出荷開始は11月に入ってからと予想される。作付面積の減少もあり、量的には前年の90％程度と少ない見込み。香川産は９月まで猛暑であったが、生育は順調で特別前進はみられない。例年同様10月20日過ぎから出荷が始まり、年内のピークは12月で、年明け１月に一旦減って、２月に最大のピークが来ると予想される。

ごぼうは、青森産は例年より大幅に早く９月初めから新ごぼうの出荷が始まった。春先の雪解けが早く、作業開始が早かったためである。11月初めから出荷が始まる秋ごぼうの収穫作業は10月中旬からピークに入り、11月上旬で掘り採りが終わる。12月からは冷蔵庫で保管した物の販売となり、豊作のため前年を上回ると予想している。

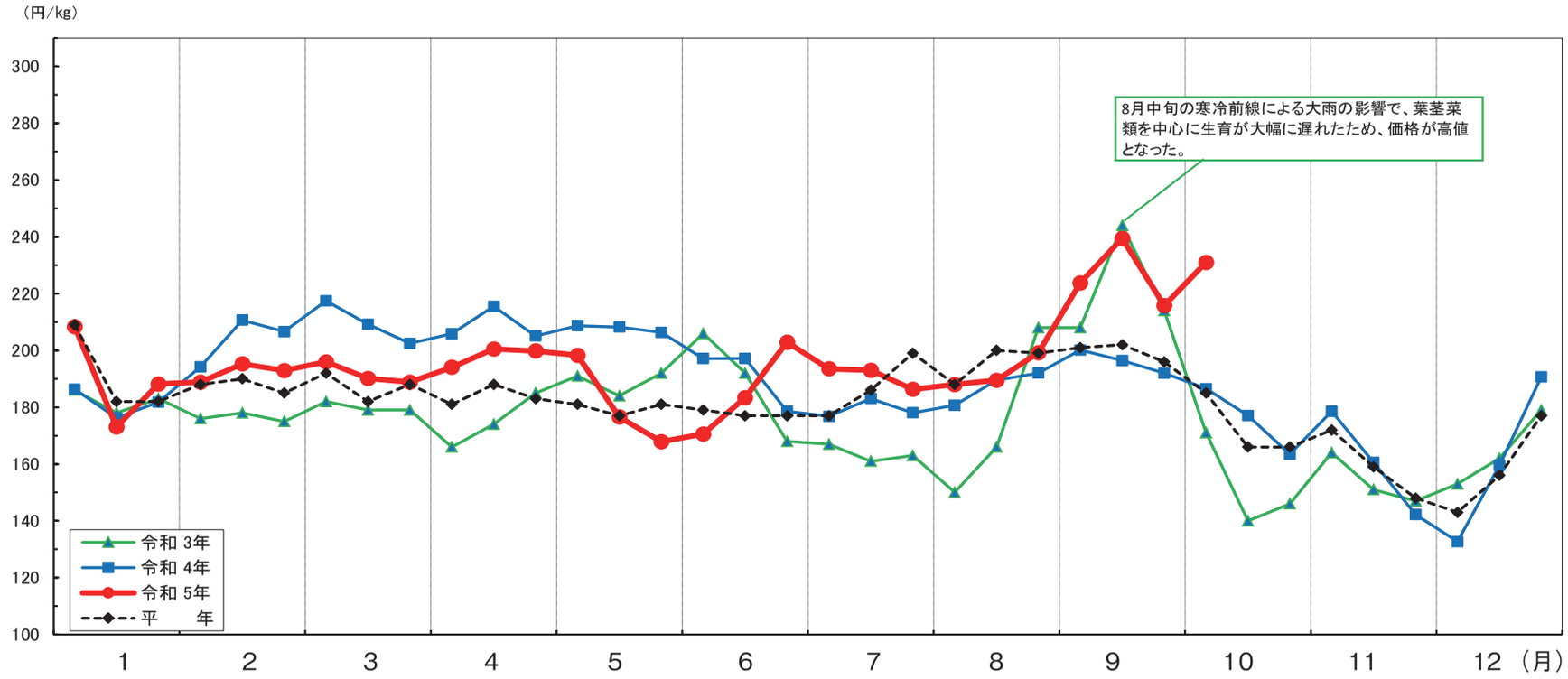
れんこんは、茨城産は猛暑と干ばつであったが、作柄には問題なく、台風の直撃もなかった。ピークは12月になるが、11月の出荷も順調で多いと予想している。

かんしょは、徳島産は10月の出荷が落ち込むことはなく、11月はさらに増えると予想される。出荷開始時期は小振りの物が多かったが、現状は平年並みの大きさになっており、L・２Lサイズを中心に前年並みの出荷を予想している。茨城産の貯蔵作業は10月中旬から始まり、現状の出荷は「紅はるか（紅ゆうか）」中心となっている。生育は順調で、豊作傾向である。高温・干ばつの影響により、圃場によってはやや形状に乱れがある。石川産は「五郎島金時」の出荷が始まっており、最大のピークは年明け１月後半から３月と予想される。まだ収穫が始まったところで全体の作柄については把握できていないが、現状では、例年ほど形が良くない。年内の出荷量は平年並みと予想している。

ながいもは、青森産の新芋は11月中旬から収穫を開始し、洗浄して11月20日過ぎから出荷開始予定である。現状は高温・干ばつにより肥大が足りない。品質の良い種芋が入手できなかったため、作付けは前年の90％となっている。

（執筆者：千葉県立農業大学校
講師　加藤　宏一）

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（東京都中央卸売市場）

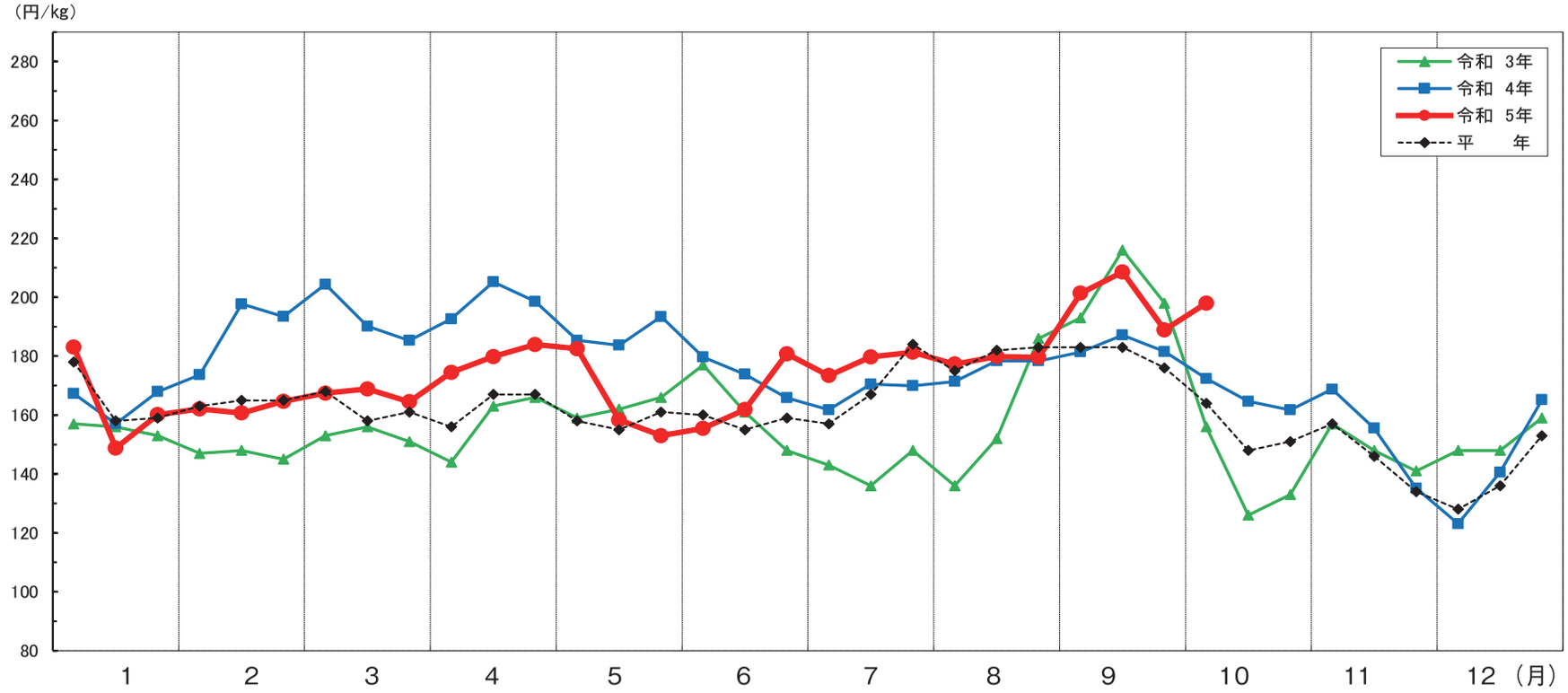


（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231								
平　　年	209	182	182	188	190	185	192	182	188	181	188	183	181	177	181	179	177	177	177	186	199	188	200	199	201	202	196	185	166	166	172	159	148	143	156	177

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（平成30年～令和４年）の旬別価格の平均値である。
注２：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の４市場のデータである。

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（大阪市中央卸売市場）



（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	159	162	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198								
平　　年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（平成30年～令和４年）の旬別価格の平均値である。
注２：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。